

第30回(2010. 1. 12 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「卯はウサギ」

十二支の「卯」は、古代中国では「茂(ぼう)」とあって、植物が茂り地面を覆うようになる状態をさす言葉だったという。これを動物の兎(ウサギ)に当てはめたものだろうが、ベトナムなどでは、ウサギの代わりに、「猫」が十二支に当てはめられている。分類学上、ウサギはムカシウサギとウサギに分かれるが、ムカシウサギは名前のとおり若干原始的なウサギで、アフリカや南米に生息しているが、奄美大島などにいるアマミノクロウサギはこの系統である。一般的なウサギは、後ろ足が長く、よく飛び跳ねる。このウサギは、ノウサギとアナウサギに分類されるが、アナウサギは文字どおり穴を掘って集団で生活するウサギで、アメリカやヨーロッパで多く見られる。このウサギを改良したものが、チンチラとかアンゴラとかの飼いウサギである。諺に「兎の毛を突いたほどの隙がない」とあるように、ウサギの毛は非常に細くて柔らかい。そこから、江戸時代の儒学者貝原益軒(かいばらえっけん、1630～1714)は薄毛がウサギとなったという説を唱えたといわれている。

うさぎおいしかのやま

童話には、お釈迦様に差し上げる食べ物が見つからなかったので、自分の肉を差し出したウサギを哀れに思ったお釈迦様が、月に送って餅をつかせているという話もあるから、一般にウサギは優しい動物だと思われるが、童話に出てくる因幡の白ウサギのように、ちょっと狡賢い面もある。諸事、見かけで判断してはいけない。ウサギは優しい、おとなしいなどのほかに「速い」という印象がある。諺にも、「脱兎の勢い」とか「二兎を追うものは一兎をも得ず」、あるいは「はじめは処女のごとく終わりは脱兎のごとし」などとたくさんある。たしかにウサギが速いのは事実だが、その原動力は前足に比べて後ろ足が異常に発達していて、山の中を走り回るのに適した体型だからだ。猟師はその特徴をよくつかんでいて、ウサギを追いかけるときは、山頂から麓に向かって追う。後ろ足が長く、前足が短いウサギは登るのは速いのだが、下るのは得意ではない。この雲竹齋は、群馬県の山中で働いていたころ、よくウサギを捕まえた。道路に出てきたウサギに車のヘッドライトを当てると、目が眩んで動けなくなる習性があるからだ。ちなみに、車にひかれたネコの死骸によく出会うが、ネコは光に向かって飛び込んでくる習性があるらしく、それも、一瞬躊躇するから、タイミング的にちょうど撥ねられてしまうようだ。

ウサギが強い光に立ちすくんでしまうのは、ウサギの赤い眼にはメラニン色素がなく、強力な光線には弱いからだといわれている。青い眼をした欧米の人たちも、ウサギと同じ理由で、強い太陽光線には弱いらしい。それに比べて、黒い目の日本人の眼はそれほど弱くはない。雲竹齋は、砂漠の多い中東勤務時代、サングラスはかけないで生活していたが、熱い陽射しと砂の照り返しは、欧米の人にはそうとうきつかったようだ。余談になるが、日本人で眼が悪くないのにサングラスをかける人がいる。中には暗い場所でもかけている人もいる。本人は格好いいと思っているのだろうが、欧米人の猿真似をして自己満足している人が、よほど顔に自信のない人なのだろう。人間は、目を隠すか、鼻から下を隠すかすると、不細工な顔でもたいがいはきれいに見える。それは見る側の人が見えない部分を勝手に想像するからだ。ブスは見たくないが美人は見たい、という妙な欲望が働くからで、この傾向は、特に男性に多くみられるようだが、これも悲しい男の性(さが)である。

ウサギの肉は、柔らかくて美味だというのが、雲竹齋は食べることができない。学生時代は生物の生理生態学が専門だったから、小動物の解剖する機会も多く、当然ウサギの解剖実習もあった。それ以来、ウサギと聞いただけで、皮を剥いだ頭蓋骨にキラキラした真っ赤な目だけが光っている、あのときの光景が脳裡に焼き付いていて離れず、思い出して気分が悪くなる。雲竹齋はウサギの

ように優しい人間なのだ。もっとも、解体した羊や山羊などの肉は平気で煮たり焼いたりして食べたものだが

雲竹斎は、少年時代、信州で過ごした。冬は非常に寒かったものだが、家ではアンゴラウサギを飼っていて、母に手袋や靴下をアンゴラの長い毛糸で織って貰い、温かい思いをしたものだ。ウサギには大変お世話になった。じつは、『故郷』という童謡の「うさぎおいしかのやま、こぶなつりしかのかわ」は、ウサギの肉は美味しい、小鮒を釣り、鹿の皮がどうのこうの 故郷は良いものだなあ、という意味だ、とつい最近まで理解していた。穴があったら、ウサギに代わって入りたい。

三毛猫のオスはいない

ベトナムなどでは、ウサギの代わりに「猫」が十二支に当てはめられている。猫の中に「三毛猫」がいる。一般には、白、黒、茶の三色の毛を持っている猫を三毛猫という。この三毛猫には牡がない。不思議なことに通常三毛猫には牝しか生まれてこない。極めてまれに突然変異で牡の三毛猫が誕生することがあるが、珍しいからこの三毛の牡猫は珍重される。昔は白と茶の猫に墨を塗り「三毛猫だぁ」と偽って売りつけたまでは良かったのだが、突然雨が降ってきて墨が流れてばれてしまったという笑話がよくあったらしい。船乗りは三毛猫の牡を守り神として珍重してきたが、その理由は、ある航海で大きな時化(しけ)に遭った際に、三毛猫の牡が乗っていた船だけが助かったという故事によってである。

猫は人間と同じで、2本の染色体が分裂して性染色体(卵子・精子)が出来るが、この染色体にXとYがあって、それぞれの性染色体が結合して個体出来る。このXとYの組み合わせが、XXならば女(牝)、XYならば男(牡)になる。猫の場合、黒い毛と茶色の毛が生える遺伝子は、X染色体にしか乗らない。しかも、黒か茶かいずれか一つだけで、黒と茶の遺伝子が一つのX染色体に同時には乗らないから、黒と茶の両方の遺伝子を持つには、X染色体が二つ必要となる。染色体の組み合わせは、XXかXYのどちらかしかないから、X染色体が二つになるというのは、すなわちXX(牝)の場合だけである。まれに、XXYといった3本ないし奇数の染色体を持つ細胞で構成された牡猫(Y染色体をもつから牡になる)が現れる。それは、染色体が何らかの異変を起こして、ねじれたり切れたり繋がったりして、このような構成になるからだが、このXXY染色体は奇数だから2分割することができないので、性染色体が造れない。これは種なしスイカの種と同じことで、種はあっても種の中身が空っぽだから一代限りとなる。ちなみに、現在ほとんどの農作物は、種が両親の良いところだけが必ず出るように交配を重ねて、両親を改良し、その種を使うが、これを生物学では雑種強勢(ざっしゅきょうせい)という。したがって、買ってきた種から、再び種を取って播けば、時には非常に悪い作物が取れることがある。これは遺伝学の「メンデルの法則」のなかの「分離の法則」によるものである。

人間界にも、両親に似ていない子供が生まれることがある。また、祖父や祖母によく似た容姿をした子供が生まれることもあるが、これは「隔世遺伝」といって、よくある現象だ。「鳶(とび)が鷹(たか)を産む」という言葉がある。子供が両親よりも優れている場合をいうが、人間の親は好き勝手に交配させたり改良したりはできないから、逆に、たとえ両親が鷹だからといってその両親から鷹が生まれるとは限りらない。そうすると、夫婦はお互いに相手の親が鳶だったからだといって、罪をなすりつけ合って夫婦げんかになるが、それは親どもの思い上がりというもので、人間社会では親が鷹であっても鳶が生まれるのが普通である。だから、鳶の君は親を恨んではいけない。鳶の君からは、もしかすると鷹が生まれる可能性だってあるのだ。もし君が鷹だったら、生まれてくる子供が鳶じゃあないかと、ヒヤヒヤしたり、実際に鳶が生まれたら、メッチャがっかりしたりするではないか。何が鷹で何が鳶だか、鷹と鳶がたくさん出てきてよくわからないという人は、鷹を特上井、鳶を並井と読み替えてみればいい。特上鮎と並鮎でもいい。しよせん単なるたとえ話だ。